

かながわ

## 助産師職能だより

第42号

2019年8月1日発行

公益社団法人神奈川県看護協会 助産師職能委員会 発行責任者 佐藤 良枝

〒231-0037 横浜市中区富士見町3-1 TEL: 045 (263) 2901 FAX: 045 (263) 2905

E-mail kanakan1@basil.ocn.ne.jp URL http://www.kana-kango.or.jp

## ごあいさつ

みなさま、こんにちは。

今年は、平成から令和となり、新しい時代の幕開けです。

助産師にとってどんな年になっていくのか、非常に注目していきたいと思っています。

昨年は、院内助産・助産師外来ガイドライン 2018 が公表されました。ご覧になられたでしょうか。2008年に作成された院内助産ガイドラインから、10年が経過し、周産期医療を取り巻く環境や医療機関の機能や特徴を踏まえ、現状に即して改定されています。

院内助産・助産師外来を開設していない施設では、このガイドラインを参考に、また、開設している施設では自己点検に使いましょう。助産師と産科医師との連携・協働は、妊産婦の多様なニーズに対応するためには重要です。神奈川県内で多くの施設が、院内助産・助産師外来を開設・維持にむけて、取り組んで欲しいと思います。

現在、神奈川県のアドバンス助産師<sup>®</sup>は、759名になりました。来年はいよいよ初めての更新となります。準備はいかがでしょうか。初年度、認定を受けた方々すべてが更新して欲しいと願い、職能委員会では、毎年、承認研修の実施や認定・更新についてサポートをしています。もう一度、条件を確認し、準備をしていきましょう。また、新しいアドバンス助産師<sup>®</sup>の誕生に向けて、協力をしていきたいと思っています。

今年の研修は、新たに母体感染や災害研修を取り入れました。是非、参加をお願い致します。また、研修後のアンケートを通じて、研修企画に関する希望も受け付けていますので、ご意見をよろしくお願いします。



助産師職能委員長  
佐藤 良枝

## 2019年度 助産師職能委員紹介

助産師職能委員長 佐藤 良枝

副委員長 川邊 康子

会 計 中村 綾美

鍋倉 幸

二見 智枝子

山下 祐子

書 記

長澤 聖子

藤谷 直子

長南 紀志子

広 報

鈴木 千秋



\*\*\* 2019年度 \*\*\*  
**助産師  
 職能研修予定**  
 (敬称略)




助産師職能集会・講演会  
**周産期メンタルヘルス**  
 ～育児支援から虐待予防まで～

開催日 ◆ 2019年7月26日

講師 ◆ 北里大学看護学科生涯発達看護学准教授 新井 陽子

**産科出血 ～出血時の対応～**

開催日 ◆ 2020年1月24日

講師 ◆ 総横浜市立大学附属市民総合医療センター  
 総合周産期母子医療センター助教授 榎本 紀美子

**(仮) CTG 判読 / 母体感染**

開催日 ◆ 2019年10月18日

講師 ◆ 神奈川県立こども医療センター産婦人科部長 石川 浩史

**(仮) 災害時母子救護の現状**

開催日 ◆ 2020年2月21日

講師 ◆ 神奈川県立保健福祉大学 吉田 穂波

**(仮) 妊娠期からの体づくり**

開催日 ◆ 2019年11月22日

講師 ◆ ウパウパハウス岡本助産院院長 岡本 登美子



## \*\*\* 2018年度 \*\*\* 助産師職能委員会 活動及び研修会 報告

2018年 4月27日(金) 職能委員会

5月25日(金) 職能委員会

職能委員会・職能集会  
7月26日(木) 講演会「母児育児支援 ～妊娠期・産褥期における乳房ケアの実際～」  
◆みやした助産院 宮下 美代子

8月31日(金) 職能委員会

9月28日(金) 職能委員会

職能委員会・研修会「新生児フィジカルアセスメント」  
10月19日(金) ◆横浜市立大学附属市民総合医療センター  
総合周産期母子医療センター部長 准教授 関 和男

職能委員会・研修会「周産期のメンタルヘルス」  
11月16日(金) ◆群馬大学医学部保健学科教授 常盤 洋子

12月14日(金) 職能委員会

職能委員会・研修会「産科救急～出血時の対応」  
2019年 1月25日(金) ◆横浜市立大学附属市民総合医療センター  
総合周産期母子医療センター助教授 榎本 紀美子

職能委員会・研修会「妊娠期からの栄養」  
2月18日(月) ◆神奈川県保健福祉大学学長 中村 丁次

3月22日(金) 職能委員会

## Voice 1



## 母乳育児支援

## ～妊娠期・産褥期における乳房ケアの実際～

北里大学病院 ◆ 重綱 梨沙



私は、助産師として勤務する中で、乳房ケアの難しさを実感し研修で何か知識を得ることができたらと思い参加させていただきました。

講義では、「体重増加不良」「直接授乳困難」「乳腺炎」「乳がん」の4つの事例を通して、乳房の状態のみかた、診断、乳房ケアの実際、セルフケアの方向性についてお話くださいました。グループワークでは、授乳支援を行う中で抱えている問題や、施設においてどのような授乳支援を心がけ、実施していくのが望ましいかということ話し合いました。

印象に残ったのは、「分娩の振り返りをしっかりとできた母ほど授乳も上手くいくようになる」という言葉でした。なぜ促進をしなければならなかったのか、上手くできなかったのか、という思いが残り止まってしまう母が多いということを知り、分娩の振り返りの重要性を改めて感じました。

また、今回の研修で、児の欲求に合わせた授乳行動をとれないことや、時間や数字にとらわれる

ことで授乳に対する不安が強くなる母が多いということを知りました。助産師の言葉など、目や耳で得た情報にとらわれやすいという特徴を踏まえ、情報を伝え過ぎず、母から言葉や気持ちを引き出すなど、介入しすぎない関わり方も大切であるということを感じました。さらに、ハイリスク妊産婦が増えており、母の背景や家族の問題も多岐にわたります。そういった家族背景などを総合的に判断し、柔軟に対応することの重要性に気づく機会ともなりました。

今回研修に参加したことで、乳房ケアの方法についてだけでなく、授乳が上手くいくようになるには分娩の振り返り等を含めた母への支援や、自信を持てるような関わり方、さらにはその家族を含めたケアが必要であるということ学びました。

今回研修に参加したことで、乳房ケアの方法についてだけでなく、授乳が上手くいくようになるには分娩の振り返り等を含めた母への支援や、自信を持てるような関わり方、さらにはその家族を含めたケアが必要であるということ学びました。



## Voice 2



## 新生児フィジカルアセスメントの研修を受けて

東海大学病院◆助産師 加藤 咲季

今回私がこの研修に参加した目的は、ラダーの申請に向けた準備とセミナーの案内に書かれていた「最新の知識を身につけよう!」という言葉に惹かれ受講させていただきました。解剖生理から疾患のポイントや症例を交えながら一つ一つ丁寧に講義いただき、あっという間の3時間でした。実際に画像や図を用いての解説により、とても理解しやすかったです。私は普段産科病棟で勤務をしています。そのため、新生児のケアに携わる中で、異常に傾いた際に NICU へバトンを渡し治療が開始されることとなります。今回の講義では、疾患だけでなく、治療の先の経過を学ばせていただきとても勉強になりました。

赤ちゃん達の可塑性や Catch up growth をサポートすることで、早期にお母さんの元で過ごせるよう、日頃より赤ちゃん達からのサインをキャッチし、正確にアセスメントしていきたいと強く思いました。

今回、苦手としていた新生児の特性から疾患について、学習する事が出来ました。そしてより赤ちゃんの事を知りたいという気持ちにもなりました。今後もお母さんとご家族が良い育児のスタートがきれいなサポートをしていけるよう頑張りたいと思います。



## Voice 3



## 周産期のメンタルヘルスケア研修を受講して

横須賀市立うわまち病院 ◆ 石橋 理恵



最近、精神的支援が必要な妊産婦が多くなっており、私たち助産師の立場でできることは何かを学ぶために研修に参加した。

今回の研修では「多くの女性は分娩体験を語りたい、と思っていること」、「バースレビューから意味づけをすることの大切さ」、「bad mother にしないこと」を学んだ。

私は、夜間授乳介助をしながら分娩の感想を聞くことがある。多くの方が自分の言葉で話を聞かせてくれる一方で、あまり語ろうとしない人、表情の暗い人がある。話したくない雰囲気がある場合、なかなか積極的にバースレビューができないことがあった。しかし、話したくない、思い出したくない経験にこそわだかまりの種があることを意味している、多くの女性は語りたいと思っていること、語らないとすれば何か引っかかっているサインであることを学んだ。



「語れるところから、語ってもらう」専門家との意味づけの中からミッシングピースを見つけることでわだかまりを回避できる。

専門家からの「あなたは精一杯頑張った」という評価や励ましは、それまでのわだかまりも「武勇伝」に変えることができるということを学んだ。

また、母性の2面性についても興味深く話を聞いた。研修の少し前、産婦さんとの関係で少し考えた事例があり、自分の関わりを振り返ったところであった。産婦さんたちは自分を見てほしい、大切にしてほしい欲求があること。ヒントをもらったような気がした。この欲求を満たしてあげること彼女たちがgood motherになることを助ける。また反対にbad motherとなっている人に対しては、背景に何かないか母性の2面性の視点でも観察してみる必要がある。

先生が示された妊産婦の異常死には、自殺者が病死の4倍ということを知り衝撃を受けた。

「助産師が、しっかりしなくてはいけないと思いませんか？」の言葉が、強く印象に残っている。

今回先生の講義を拝聴し、妊産婦に関わる私たちにだからできることが具体的にわかった。テーマであったバースレビューの意味をもう一度再確認するとともに、意味づけることgood motherになれるような支援を目指していきたいと思う。

Voice 4



## 産科救急～出血時の対応の研修に参加して

平塚市民病院 ◆ 柳川 衣以子

今まで、産科危機的出血に遭遇したことはなかった。しかし、今回の研修に参加し、誰にでも、いつでも起こりうることであったと分かった。

産科危機的出血は、初期対応と積極的予防管理をしていくことが重要だということも学ぶことができた。

産後の出血が多い場合、主に出血量、子宮収縮状態のみを伝えており、バイタルサインから考えられる、ショックインデックスなどの報告はしていなかった。ショックインデックスで客観的に出血量を算出できることで、緊急性や輸血の必要性の判断にも繋がる要素となることを学ぶことができた。

今後は、意識的にショックインデックスの報告ができるようにしたいと考える。

また演習の中では、輸血を想定する場面があったが、輸血の請求から実施までには実際には繁雑

な作業が多いため、日頃から方法などを確認しスムーズに輸血ができるようにしておく必要があると感じた。

さらに、緊急時ほどコミュニケーションが重要になってくる。緊迫した状況では声を出すことを忘れがちになってしまうため、医師の指示の復唱や自身の行う処置の声出しなどを積極的に行っていきたい。また、医師の指示を待つだけではなく、必要だと感じた処置は自分から医師に提案をするなど、自ら声を出してコミュニケーションを取っていくことを心掛けたいと考える。

産科出血は迅速な対応、積極的管理を行うことで出血による死亡を防ぐことができるものである。そのため日頃から予測的に関わり、研修で学んだことを活かすと共に、スタッフ間で統一して実践できるよう病棟での学習の機会を持ちたいと考える。



**Voice 5**

## 妊娠期からの栄養の研修に参加して

湘南藤沢徳洲会病院 ◆ 高橋 美里



助産師として働き始めて4年目になり、産科外来や両親学級などで保健指導を行う機会も多くなりました。その中でも栄養指導は指導の伝わりづらさや行動変容の難しさを感じる事が多くありました。今回の研修を通して、自分の指導の問題点を見出すことが出来、助産師が栄養指導を行う意義を学ぶことが出来ました。

研修の中では、若年女子の低栄養問題が取り上げられていました。私も以前に、長年の偏食によって低栄養状態であった妊婦を担当させて頂き、栄養指導で大変苦労した経験があります。当時は経験も少なく、栄養指導を行っても妊婦の食習慣をなかなか変えられず無力感を感じて、これまでの食生活を今ここで変えるのは無理があるのかと思うこともありました。研修を終えた今考えると、

なぜ栄養改善を必要なのかが曖昧であり、そこが、指導が届かない理由であったのかもしれない。

私は研修の中で特に印象に残った言葉がありました。それは「Nutrition in the First 1000 Days 最初の1000日の栄養」胎児栄養が生涯にわたる健康状態を決定するという言葉でした。初めの1000日の中で助産師が関わる時期は多くあります。私は胎児期からお母さん達の栄養状態をしっかりと評価し、母と子の食習慣を修正する機会を逃さないようにしなければならないという意識になりました。

今回研修を受けさせて頂き、助産師として働くことの責任や重さ、やりがいを再確認出来ました。自分自身が次世代に命をつなぐ役割を担う助産師であることを忘れず、日々の母子との関わりを大切にしていきたいです。

このような貴重な学びの機会を頂き感謝いたします。ありがとうございました。



### 2018年度 助産師職能委員紹介

助産師職能委員長	佐藤 良枝	会 計	小澤 彩
副委員長	小川 喜美子		山下 祐子
書 記	川邊 康子		柳澤 裕美
	藤村 恵美		鍋倉 幸
	長澤 聖子	広 報	金 スリヨン

